

普及事業の評価結果及び改善方向に関する助言・提言

1 普及指導活動の体制について

(課内の分担、関係機関との連携、普及指導員の資質向上を含む)

<p>関係機関との連携について意識して強化していることが感じられ評価できる。</p> <p>今後もさらに関係機関が密に情報を共有し、連携の強化を進めていただきたい。</p>
<p>農協等との連携に加え、農業経営体間の連携（つながり）を築き、地域の課題に取り組むという姿勢が共通してうかがえた。こうした取組を現場で実現するのは簡単なことではないが、それを可能にした一つの要因として、普及指導員の資質の高さがあげられる。</p>
<p>生産技術指導や経営分析だけではなく、現場で「ひととひと」「組織と組織」をつなげる役割が重要になるので、コミュニケーション能力やコーディネート能力を実践的に高めていけるような教育プログラムの開発が必要と思われる。現時点でも講習等が行われていると思うが、それだけでは対応できないことから、普及指導員育成の課題として改めて検討する価値はあるように思える。</p>
<p>「普及指導員の資質の向上」については、関係機関などとの連携をうまく図っていけるリーダー、サポーターを育成するために、「リーダーシップ」「ファシリテーション」「プロジェクトマネジメント」「モチベーションアップ」「コミュニケーション（ハウレンソウ）」など、今までにない視点を取り入れていただきたい。</p>
<p>本県で取り組む必要がある新技術の開発・実証については、産地課題や他県・研究機関の動向などから、関係機関と調整の上、常に体系的に整理していただきたい。必要であれば、産学官連携などの取組も積極的に企画してほしい。</p>
<p>担当普及員の個人的能力だけに頼るのではなく、チームを組んで課題にあたるべきケースもあるため、チームを組むことができる人員の確保が必要と考える。</p>

2 普及指導活動の計画について（普及課題・対象の選定、目標設定等を含む）

発表のあった2事例は、いずれも農家の高齢化や所得の減少などの実情に対応した課題が設定されていると評価できる。しかし、一般県民から見れば、どのような選択の上でこれらの課題が出てきたのかわからないことも考えられるので、愛知県としての農業戦略を起点とした課題選択の仕組みを明示することが必要である。

普及指導の内容によっては1～2年で結果を出せるものがあれば、3～5年、あるいはそれ以上経過しないと結果が出ないものもあるので、綿密な計画が必要である。

地域や時代の流れに沿った若手生産者の生産技術の向上、儲かる農業の実現と経営能力の習得、ICT活用などの指導の充実を図っていただきたい。

産地課題の吸い上げにおいて、個人の問題なのか、地域の問題なのかを見極め、常に地域の課題、県域への普及性を意識した課題設定をお願いしたい。

全体的に課題をみると、現場での組織、仕組み、ネットワークをつくるのがキーとなっている。これらは現物として目に見えるものではなく、具体的数値で表現できるものではない。組織化には信頼関係の構築・深化が必要であり、ある程度の時間を要する。短期的な具体的数値目標を定めて評価すべきではない。このように目に見えない組織的基盤、発展のための土台づくりを評価する工夫が必要である。

また、単に数値目標を追うだけでは本質的な活動計画とならないため、計画策定においてこれまでと違った視点が必要になると考える。課題に沿った形で連携をつくり広げていくという定性的な手順を明確に描くことが必要である。

地域（尾張、西三河、東三河、山間地域）と品目（稲麦大豆、露地野菜、施設野菜、果樹、施設花き、畜産）、対象農家（専業、多様な担い手、規模）をマトリクスで整理し、課題（労働力不足、技術向上、経営改善・・・）ごとに、関係機関を含めた役割分担を俯瞰して戦略を立案することも必要と思う。

3 普及指導活動の経過、実績及び成果について

全国的に注目されるような成果が出ていると判断できる。これを単発的な成果ではなく、今後の普及活動に活かしていけるような蓄積が必要であり、それを普及指導員の育成につなげていくことが必要である。

具体的な普及活動といえば、新規作物の導入や新技術の導入に目が行きがちであるが、その普及活動のプロセスにおいて「ひととひと」のつながり、「組織（関係機関等）と組織」のつながりをどのように形成し、それがどのように機能したのか、うまくいかなかった部分も含めて整理しておく必要があると思われる。

今回の外部評価会議で発表された二つの事例は、いずれも単なる技術的課題を技術的に解決するだけではなく、様々な「関係者」を巻き込んだ「仕組み」を作り上げることによって解決を図っている。こうした取組が、今後の農業課題の解決の一つの標準形になると思う。今後、これをさらに発展させるためにも、今までの経験から得られたものをまとめて、「仕組み作りのノウハウ集」を作成することを勧める。これができるれば、愛知県のみならず日本全体の農業の発展に大いに役立つものと思う。

すべての職員が、産地の構造を変える取組（例：部会再編、新規品目導入など）を経験できるわけでないので、取組事例をケーススタディとして活用できる仕組みを強化してほしい。

発表された2事例とも、取組内容が良く、前向きで着実に数字を上げ成果が表れている。地域の実情や農業者のニーズを把握し、普及指導員が長年にわたり農家や部会に寄り添うことで信頼関係を構築することにより、農家の意識向上につながっている。

新城の和牛の事例は、小規模・高齢な和牛繁殖農家が経営を継続でき、県内最大の和牛子牛産地の維持等に繋がった取組として評価できる。高齢化が進む状況を踏まえ、この支援体制を一層強化することが重要であり、若手部会員と高齢農家とのウィンウィン（相互補完）の関係性が継続できるよう、農業改良普及課が支援していく必要がある。日本農業賞や愛知農業賞の受賞をPRするなどイメージ戦略（ブランド化）にも取り組み、和牛子牛のブランド化を目指してほしい。

豊川のアスパラガスの事例は、施設園芸産地の再構築のモデルとして評価できる。新規作目として高齢者でも取り組めるアスパラガスに目を付け、施設園芸のノウハウをアスパラガスへ活かす取組は面白い。今後、一層、部会員相互の交流、優れた技術の発掘と部会での共有を進めるとともに、とよかわ就農塾との連携、経営不振農家への作目転換の提案などにより、アスパラガスのブランド化を目指してほしい。

また、アスパラガス以外の作目を含めた多角的なモデルケースができれば、全国からも注目されると思われる。

4 地域農業の振興に向けて普及事業が取り組むべき活動内容等の提案

農業・農村の価値を打ち出して、農を基本に据えた「豊かな地域社会づくり」に貢献できるように、普及事業の対象範囲を再考する時期に来ているのではないか。生産技術指導や経営指導、生産組織化、産地化、担い手育成に事業範囲を限定せず、農業経営、生産関連組織の枠を超えて農外に働きかける活動を構想する必要がある。

農業の産出額や就業人口の割合は小さくなってきているが、その多面的な役割は大きくなってきていることから、普及事業の枠組みも連動していかなければならないのではないか。

外圧だけではなく、国内の米政策の変革を受けて全国的に地域農業が大きく変わる可能性がある。産地間競争の激化、新興産地の台頭などが目立つようになる中で、愛知県の農業の方向性を明確に具体的に示す必要があり、それに呼応する形で普及事業として何をすべきかの整理が必要になると考えられる。

新規就農者受け入れ支援についてのパネル発表があったことは注目に値するものと思われる。新規就農から成長発展期、さらには高齢化による諸条件の変化に対応できる農業モデル（今回のアスパラガスの事例など）をつなげることで、長期持続的に農業に携わることができる体制づくりとサポートの仕組みづくりを研究、実現していただきたいと思う。

世界情勢の変化や地震などの自然災害のリスクに対応できるようにアドバイスしてほしい。

5 評価会議について意見（普及事業全般含む）

発表者のプレゼンテーションは高水準であり、わかりやすい。

パネル展示をみる時間がほとんどなく、発表課題以外の課題（パネル展示）についても担当者から話を聞く機会がほしい。ディスカッションは1時間以内に短くして、パネル展示をみる時間を増やした方が評価する側としては有難い。

毎年評価会議が実施されているが、本年度の「目標」は何だったのかは語られないままになっている。まず初めに普及事業についての目標を確認し、事例発表などを通じて、その目標が達成できたのかどうかを「検証」するような内容でもいいのではないかと思う。県内各地から多くの担当者が集まるので、皆で今年の「成果」を確認し、併せて次年度の「課題」を模索する、という内容であってもいいと思う。次年度以降の課題として検討をお願いしたい。

目標に向かって着々と成果が表れていると思う。課題に挙げられていることが5年後に達成できることを願っている。

ポスターは、せっかく作成するのだから、もう少し文字を大きくしたほうが良い。また、きちんと説明したほうが、より効果的ではないかと思う。

6 その他

パネルディスカッションで突然発言を求めても、適切に発言してもらえた。このような対応ができることは大変重要であり、資質の高さと積極性の表れといえる。

普及事業は「ひと」を相手にする仕事であるので、こうした機会を増やしてコミュニケーション能力、発信能力を高めるべきである。

農業分野における女性の進出を大いに期待したい。

交流の活発化・優れた技術の共有化によって、より良い商品が生まれ、人と人との輪が広がる。チームワークの良さを感じた。